素材のこだわり

・ブリティッシュウールメルトン/まるで星が瞬く夜空のような表情
まるで星が瞬く夜空のような表情のこの生地の原料には、この商品の原料はイギリス・ウェールズ地方の丘陵で育った ラドーナ種の羊毛を使用しており、膨らみと厚みと暖かさを持ち合わせた特徴があります。さらに 熟練の技術者により、ゆっくりと時間をかけて縮絨加工をなん度も繰り返しフエルトのような柔らかく滑らかな肌ざわりと保温性と撥水性を持ち合わせています。さらに ウールケンピを混ぜ込み衣装性も優れており、オリジナル性と他には無い唯一無二の冬のアイテムに最適な商品です。紡績は泉州（繊維を糸にするプロセス）、尾州で織り整理になります。

・ブリテッシュウールツイード/クラシックで温かみのある表情とタッチ感
クラシックで温かみのある表情とタッチ感のある高密度に織り上げたこの織物は、オリジナルのトップカラーで展開されています。283g/mの目付を持ちながらも、美しい光沢、軽さ、そしてなめらかな風合いを兼ね備えています。また、この梳毛織物は、適度な保温性を持つと同時に、吸湿性と保湿性にも優れているため、蒸れにくいのが特徴です。さらに、伸縮性と弾性が高いため型崩れしにくく、シワも寄りにくい性質を持っています。そのため、仕立て映えする高品質な商品です。紡績は三河（繊維を糸にするプロセス）、尾州で織り整理になります。

・ウールギャバジン/タフでエレガント、美しい光沢と軽さとなめらかな風合い
タフでエレガントな表現を持つウールギャバジン。この特徴は高密度で織り上げた この織物はオリジナルトップカラーで 展開。さらに、283g／mの目付が ありながら、美しい光沢と軽さとなめらかな風合いを持ち合わせています。また、この梳毛の織物は適度な保温性があり、加えて吸保湿性に優れるため蒸れにくく、伸縮性と弾性が高く 型崩れしにくく シワもよりずらく仕立てばえのする商品です。尾州の織物工場の企画で中国で一貫で生産。

・ツイルリネン反応染＋墨染
国内で織り上げた40/1リネン100%の生地を反応染めで染色後、生地に味のあるムラ感や表情感を出すために、日本古来の墨染めを施しています。これにより、墨の深みが加わり、ランダムなシワ感と独特な表情が生まれる生地に仕上がっています。

・デニム
上品な光沢とリジットな表情をもったメイドイン岡山デニム。吸水性と発散性が高く、毛羽立ちが少ないとされるピマコットンを経糸に使用。高級感のあるなめらかな風合いのライトデニムで、硬質な表情でありながら、しなやかな風合いで着やすさがあります。時と共にフェードする色合いをお楽しみください。

・Supima綿とFrenchLinenの超高密度ツイル
Supima綿とFrenchLinenの超高密度ツイルで表面はSupima綿の上品な細番手ならではの自然な光沢感と滑らかな肌触りで、裏面は麻の持つナチュラル感があり、肌に張り付かずさらりとした肌触りになっています。きめ細かく高い解像度に微妙なうねりとシワ感があり、陰影を繊細に表現します。表情に深みのある素材です。

・コットンリネン　リバーシブルカルゼフィナージュ
経糸にコットンの40/—を、緯糸にリネンの40/1とコットンの16/—を使用して織り上げた生地です。昔ながらの手法で染色を行い、仕上げに天日干しで乾燥させ、ナチュラルなワッシャー感を持つ生地に仕上げています。表面と裏面で異なる表情をしており、表面は右綾のような仕上がりになっています。

・裂き織（幸呼幸JAPAN様　HPより抜粋）
「裂き織」の起源は江戸時代中期、寒冷な気候のため綿や繊維製品が貴重だった東北地方にあると言われています。当時は日常生活に用いる衣類や布団などの布を、裂いて細く繊維状にし、ねじりながら織り上げていました。

17世紀になって、東北地方にも古木木綿（木綿の古布）が入るようになり、その肌触りのよさは多くの人を魅了しました。しかし、古布とはいえ安いものではなかったため、貴重品として「使い切る」文化の中で裂き織技術が発展していきました。

近年は、繊維製品が手に入りやすくなり、裂き織はあまり織られなくなりましたが、一方で、その独特の風合いや芸術性、古布や残反（生地の残り）を利用するという特色が注目され、アパレル・インテリア系のデザイナーからもデザイン性の高いエコファブリックとして見直されてきています。

裂き織は、その工程のほとんどが人の手で行われます。布を細く裂いてよこ糸をつくり、経糸を通した織り機で一段一段ていねいに織り込んでいく。それは単なる作業ではありません。人の手を通じて、ものを愛おしむ気持ちも一緒に織り込まれています。だからこそ、機械では表現できない暖かみのある独特な風合いを生み出すのです。

・ジビエレザー（ポルティラ様　HPより抜粋）
原皮は塩漬け状態で工場にやってきます。皮に残った脂肪や毛を除去し、なめし工程に入ります。弊社が独自に配合した無害ななめし剤を使用してなめしを行います。有害な重金属、化学物質を使用しないので、なめし工程で出る削りカスなども再加工し、リサイクルが可能です。皮革流通量の9割を占めるクロム革より圧倒的に安全で植物タンニン革では出せない柔らかさがあります。なめし上がりがホワイトなので淡色での染め表現も可能です。

“ エコ ”“ エシカル ”“ サスティナブル ”
既に聞きなれた言葉になっています。 Portierraは使う人だけでなく、環境にも配慮したものづくりを追求し続けます。ポルティラは、自然の恵みを余す事なく使う事を考え革作り、商品作りをしています。 表面塗装を行えば隠せるキズもあるのですが、本当の革の風合いをお楽しみ頂きたいとの思いからそのほとんどの製品において塗装はせず染めのみのナチュラルな革を使用させて頂いています。

＜ジビエレザーの背景＞
現在、日本では鹿による農作物被害が年間約60億円にも上ります。その背景にはオオカミの絶滅や猟師の減少、地球温暖化など複雑な要因があります。駆除された鹿の多くが廃棄される中で、生命の尊さを考え、その皮革を衣服へ取り入れることで、新たな命を生み出したいと考えています。

現在日本の鹿による農作物被害額は、年間60億円。未報告分を入れればおよそ100億円ともいわれています。鹿は爆発的に増え続けており1990年に約40万頭いた鹿が、2015年には約400万頭、わずか四半世紀でそ

の数は10倍にも膨れ上がっているのです。政府は10年後に頭数の半減を目指しており、その為には年間60万頭は捕獲駆除する必要があるという事です。

鹿が爆発的に増加したのは、古くはオオカミの絶滅に始まり、無計画な乱獲と保護、林業の盛衰、猟師の高齢化、里山の減少、そして地球温暖化、、、様々な要因が複雑に絡み合っています。では、駆除されたシカはどうなっているのでしょうか？実はほとんどが廃棄物として山で遺棄されるか、焼却処分されています。ジビエ料理として食べられているのは10％以下、そのお肉の副産物である皮革の利用は1％にも満たないのが現状です。

ポルティラは自然の恵みを余す事なく使う事を考えます。狩られるのであれば、お肉は食べ、その皮は日本の野山が育んだマテリアルとして利用する。“人の利己的な経済活動により社会問題化した害獣”、ポルティラは皮なめしという微力な営みではありますが、その問題解決の一つの足がかりとなり、解決に向けた横のつながりを構築していこうと考えております。